



No.1

2021年2月26日

Newsletter

日本遺伝性腫瘍学会 / The Japanese Society for Hereditary Tumors

目次

開催報告

第26回日本遺伝性腫瘍学会開催報告	n1
第22回遺伝性腫瘍セミナー開催報告	n1
2019年度 第22回前期遺伝性腫瘍セミナーを開催して	n1

お知らせ

第27回日本遺伝性腫瘍学会学術集会開催案内	n3
第23回遺伝性腫瘍セミナー開催報告	n3
理事会・評議員会開催報告	n3
編集後記	n3

開催報告

第26回日本遺伝性腫瘍学術集会開催報告

第26回の学術集会は、「チームで支える」をテーマとして、当初大阪での開催を予定しておりましたが、今般の新型コロナウイルス（COVID-19）の感染対策として全面Web開催の運びとなりました。令和2年8月21日～31日の10日間にわたり配信致しましたところ、800名を超える方々のご参加をいただき無事盛会裡に終了することができました。

プログラム内容と致しましては、理事長講演、特別講演（エピジェネティクスと医学）、4つの教育講演（ゲノム医療入門3演題、遺伝性腫瘍入門1～3 9演題）、2つのシンポジウム（チームで支える6演題、動き出したゲノム医療－現状と展望－5演題）、パネルディスカッション（「がん医療」と「遺伝医療」を結ぶ支援システム4演題）、4つのワークショップ（BRACAnalysis®とPARP阻害剤6演題、血縁者診断とサーベイランス6演題、リスク低減手術の現状と課題6演題、遺伝性腫瘍登録事業の現状と将来4演題）、1つの会員講習（バリエントレポートの書き方1演題）、優秀演題（6演題）、一般演題（120演題）、ポスタープログラム（66演題）、となりました。

本学術集会の企画から開催に至るまでご支援頂きました、理事の先生方、企画委員の先生方、多数の演題登録を頂きました会員の皆様に、心より感謝申し上げます。

第26回日本遺伝性腫瘍学会学術集会会長

玉木 康博（大阪国際がんセンター 乳腺内分泌科）

川崎 優子（兵庫県立大学看護学部）



第22回遺伝性腫瘍セミナー開催報告

2019年度は前期と後期に分けて、第22回遺伝性腫瘍セミナーが開催される予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を鑑みて、後期セミナーが2020年度にオンライン（講義のみ）で開催されました。

■テーマ：遺伝性乳がん卵巣がん症候群

■前期実行委員長：中島 健先生（がん研有明病院）

後期実行委員長：吉田輝彦先生（国立がん研究センター中央病院）

■日程と会場

前期：2019年8月16日（金）～18日（日）

がん研有明病院・ホテルサンルート有明

後期：2020年10月1日（木）～31日（土）

講義のみ e-learning 形式

2019年度 第22回前期遺伝性腫瘍セミナーを開催して

公益財団法人 がん研究会 がん研有明病院 臨床遺伝医療部 中島 健

第22回前期家族性腫瘍セミナーを実行委員長として開催を担当したので遅くなりましたが報告いたします。2019年8月16日（金）午前から18日（日）午前までの日程で、講義をホテルサンルート有明（現：有明相鉄グランドフレッサ東京ベイ有明、東京都江東区）で行い、ロールプレイ演習は当院外来診察室等を用いて開催しました。

私事ですが、私の日本遺伝性腫瘍学会（旧：日本家族性腫瘍学会）との関わりは過去の本セミナー（家族性腫瘍カウンセラー養成セミナー）参加がきっかけです。前任の国立がん研究センター中央病院内視鏡科所属時に2004年のセミナーに初めて参加いたしました。アットホームな雰囲気を懐かしく思い出します。その後2015年の第18回前期家族性腫瘍セミナーの際に準備委員長の菅野康吉先生（栃木県立がんセンター研究所 がん遺伝子研究

室・がん予防研究室、国立がん研究センター中央病院遺伝相談外来)からのご要請を受けて、実行委員長を務めさせていただいた経緯があります。一方、日本遺伝性腫瘍学会は2010年を過ぎた頃から、がんゲノム医療と、遺伝性乳がん卵巣がん診療(HBOC: エイチビーオーシー)の普及(いわゆるアンジーショック)をうけ、学会会員が年々増加傾向にありました。セミナーについても、臨床遺伝専門医等は資格維持のためにセミナー受講義務があることもあり、セミナー申込み開始からすぐに定員が埋まってしまう傾向にありました。そのような状況下2018年10月に家族性腫瘍セミナー準備委員会が以下のメンバーで構成され開始されました(敬称略・担当理事:田村和朗(近畿大学), 委員長:吉田輝彦(国立がん研究センター中央病院), 副委員長:中島健(がん研有明病院), 委員:織田信弥(九州がんセンター), 委員:田辺記子(国立がん研究センター中央病院), 委員:矢形寛(埼玉医科大学))。テーマはHBOCと決まっていたのですが、開催にあたっていくつかの課題とポイントがありました。①がんゲノム医療の実装に伴い germline mutation へ対応できる人材育成のニーズが高まっている。②2018年度からの学会による家族性腫瘍専門医(現:遺伝性腫瘍専門医)の開始と、5年前からのFCC(Familial Cancer Coordinator)で合計200人の単位更新が必要となる。③そのためセミナーの収容人数を増やす必要がある(目標200名)、④2019年度まではAMED吉野班の後援もあり、年二回の開催を実施できる可能性あり、⑤毎回初歩的な講義を繰り返すのではなくアドバンスコースを設置し、単位制も導入し、いわゆるベテランはそちらの受講へ移行してもらう、等です。①②③を踏まえ、なるべく多数の参加者を受け入れたい方針でしたが、同時に本セミナーの特徴の一つである充実したロールプレイを実施するための場所確保が問題でした。講義に関しては大きな会議場を確保すれば人数の問題は解消しますが、ロールプレイは個室で行うのが理想です。しかし、小さな個室を多数借りた場合には高コストが問題です。結局、がん研有明病院外来診察室でどうにか開催できる見通しがつき、私が前期実行委員長を務める事になりました。病院の会議場では200名は収容できず、近隣ホテルであるホテルサンルートを8月中旬お盆の時期でしたがなんとか確保することができました。(参加者からは後でお盆開催には反対のご意見も当然いただきました。)

セミナー講義内容を大きく次の3つに分けると以下になります:A:基礎的な内容(初心者は履修が必要な、人類遺伝・分子遺伝・がん遺伝とがんゲノム・遺伝カウンセリングの基礎部分)、B:コアの内容(疾患テーマ特異的な内容で当該回のセミナー講義の中心的な部分)C:時事的内容(先進的な取り組みなどのトピックスや倫理・行政・患者社会に関する話題)。通常セミナーでは主にAとBを、そして2019年度に初めて開催予定となったアドバンスコースはCを取り扱う方針になりました。セミナー主題はHBOCと決まっており、テーマと担当講師に関しては、矢形先生がプログラム委員長としてご尽力され決定いたしました。

結局217名の参加者を受け入れることができました。セミナー直前の台風10号の影響にて、事務局からのテキストの宅配が一

部間に合わない、講師や参加者の飛行機が欠航等のトラブルが発生しましたが、一応時刻通りにスタートしました。1日目午前 of 基礎的なA領域を田村和朗先生、関根茂樹先生、織田信弥先生、田辺記子先生の熟練講師陣に担当していただきました。各総論を30分で担当していただきありがとうございました。お昼に富田尚裕理事長による学会状況についてのプレゼン後、午後の講義が始まりました。B領域は乳腺外科、婦人科、肝胆膵内科等の分野において日本を代表するエキスパートに担当していただき好評でした。講師の先生方に厚く御礼申し上げます。田村智英子先生には海外のHBOC診療の状況について担当していただき、アンケート結果でも好評でした。C領域の一部として、3日目にがんゲノム医療を取り上げ角南久仁子先生に担当していただきました。講義会場は横に長い会場のため2つの画面を使用しての講義でしたが、大きな混乱もなく実施することができました。

ロールプレイは病院で行うため、2日目の講義終了後、参加者全員にホテルから当院まで徒歩で移動していただきました。約500mの移動ですが、真夏の午後1時過ぎという時間帯でしたので、炎天下のおかげで私自身大粒の汗をかいたのを思い出します。経費削減のため病院設備を利用した事情が背景にあり、この場を借りてお許しいただきたいと思います。ロールプレイは38グループで行いましたが、これは過去最大数で、金曜日の病院の診療終了後にロールプレイのために部屋や案内の準備をしていただいた当院臨床遺伝医療部および看護師スタッフに感謝いたします(撤収も大変でしたね)。

3日目の午前の振り返りでは、武田祐子先生の司会で、用語の呼び名の再確認(エッチボック→エイチビーオーシー・ブラッカ→ビーアールシーエー・遺伝性乳がん卵巣がん→遺伝性乳癌卵巣癌症候群、変異→バリエント)から、杉本先生によるVUSの解釈のコメントおよび各ロールプレイについての生じた問題点に関する質疑が活発に行われました。ロールプレイのコメント集計に、googleフォームを初めて導入したが、携帯だと入力しにくいとの意見もありました。今後コロナ禍が過ぎリアルワールドでのセミナーが再開された場合には検討課題となります。

2019年2月頃より矢形先生が体調を崩され、非常に残念ですがその後逝去されました。この場を借りて厚く御礼を申し上げるとともにご冥福をお祈りいたします。充実した講義内容は矢形先生の考案によるプログラムの賜物です。優しさあふれる矢形先生のお姿を今でも思い出します。セミナー終了半年後の2020年冬からコロナ禍に見舞われたため、今振り返ると大会議室での聴講、活発な討議、診察室でのロールプレイ、ホテルでの懇親会等は大変懐かしく思い出されます。本セミナーは、遺伝性腫瘍に関わる、またはそれを目指す多職種の方が全国から集まり知り合いになれること、再会を果たすことができる場でもあります。本年度のセミナーはオンライン開催となりましたが、またいつの日か学会やセミナーで皆様と直接お会いできる日を心待ちにしております。関係者の皆様、参加者の皆様ありがとうございました。今回の反省点を今後のセミナーに是非活用していきたいと考えております。

お知らせ

第27回日本遺伝性腫瘍学会学術集会開催案内



第27回日本遺伝性腫瘍学会学術集会の会長を仰せつかりました。埼玉県立がんセンター腫瘍診断・予防科の赤木究と国立がん研究センター東病院腫瘍内科の向原徹です。2021年6月18日(金曜日)・19日(土曜日)に埼玉会館(浦和市)で本学術集会を開催させていただきます。昨年来より私たちを悩ませてきました新型コロナウイルス感染状況も未だ見通しが立たず、ハイブリッド形式での開催を計画中です。十分な感染対策を行いながら、有意義な学術集会になることを目指しております。

学術集会のテーマは「がんゲノム医療と遺伝医療～ボーダレス化の中で躍動する～」としました。近年のがんゲノム医療の急速な発展に伴い、がん治療と遺伝医療の両方を巻き込んだ新たな医療の在り方が求められています。関係する診療科や職種が情報を共有し、互いに連携しながら対応していくことが期待されています。そうした思いをこのテーマに託しました。

本学術集会では、HBOC、リンチ症候群のみならず、その他の

遺伝性腫瘍、がんゲノムプロファイリング検査を用いた診療、すぐそこに迫っている全ゲノムシークエンス時代への対応、オンライン遺伝外来、個人情報・ゲノム情報の取り扱い、事例検討会、バリエーションの評価など様々な角度から遺伝性腫瘍を学び、考える場を提供できればと思っております。また、遺伝性腫瘍について基本的なことを学びたいという方のために、学術集会期間中、充実した教育プログラムをオンデマンドで配信する予定です。

多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第27回日本遺伝性腫瘍学会学術集会会長

赤木 究 (埼玉県立がんセンター腫瘍診断・予防科)

向原 徹 (国立がん研究センター東病院腫瘍内科)

第23回遺伝性腫瘍セミナー開催案内

今回は動画による講義視聴と、web会議システムを利用したロールプレイ研修による開催形式で行われています。

■テーマ：リー・フラウメニ症候群

■実行委員長：吉田輝彦先生 (国立がん研究センター中央病院)

■プログラム委員長：田村智英子先生 (FMC 東京クリニック)、
服部浩佳先生 (名古屋医療センター)

■日 時：2021年1月19日(火)～3月31日(水)

理事会・評議員会開催報告

< 2020年度 第2回理事会 >

日 時：2020年10月17日(土) 13:00～16:40

方 法：オンライン

議事録：学会ホームページ上に掲載 (学会概要>理事会・評議員会報告>理事会報告>2020年度第2回理事会議事録)

http://jsht.umin.jp/outline/minutes/pdf/2020minutes_director1.pdf

< 2020年度 定時評議員会 (社員総会) >

日 時：2020年6月19日(金) 14:30～15:30

会 場：千里ライフサイエンスセンター5階

議事録：学会ホームページ上に掲載 (学会概要>理事会・評議員会報告>評議員会報告>2020年度評議員会議事録)

http://jsht.umin.jp/outline/minutes/pdf/2020minutes_councilor.pdf

編集後記

学会名称が「日本家族性腫瘍学会」から「日本遺伝性腫瘍学会」に変更となつてから、初めてのニューズレター発行となります。まずは、復帰第一作を(!?) ということで、学会活動の近況報告号となりました。

COVID-19の影響により生活様式が大きく変わり、学会会員同士も直接に顔を合わせる事が難しい1年でした。皆様におかれましては、ZOOMやTeamsといったツールにも慣れ、Web会議の「はしご」も日常茶飯事ではないでしょうか。本年度の学会

事業もWeb開催中心となりました。利便性は上がったと感じつつも、やはり直接お会いできないことにさみしさも感じております。

末尾になりましたが、今回ご寄稿いただきました先生方に心より感謝申し上げます。読者の皆様には、ニューズレターに対するご希望やご意見・ご感想などを寄せいただけますと幸いです。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

(金子景香、田辺記子)